

平成22年度 大学院工芸科学研究科博士後期課程 学位記授与式
学長告辞

本日、博士の学位を取得されました皆さんに対して、京都工芸繊維大学を代表して心から祝意を表します。

また、長い間にわたって皆さんの研究を支えてこられたご家族および関係者の方々に対して深い敬意を表します。

京都工芸繊維大学は、昭和63年に大学院の組織を改組し、工芸科学研究科を設置いたしました。そして、今までに、765名の博士号取得者を輩出し、多くの知的財産を着実に蓄積してまいりました。

本日、皆さんには、それぞれ課程博士第586号から第611号まで、また、論文博士第181号から第182号までの学位を授与させていただきましたが、皆さんの研究業績は本学の知的財産とさせていただくことになります。

提出していただきました学位論文や報告書は、広く人々に公開されることになり、皆さんの後輩である学生の研究のために、また、それぞれの学問分野の新たな展開のために、さらに、技術革新や産業創生の新たな素材として利用されることになります。

皆さんは、自らの専門について輝かしい成果を挙げ、本日めでたく博士の学位を取得されました。明日からは、新しい環境で、それぞれの将来計画の実現に向け、勇往邁進されることと思います。

3月11日に起った東北関東大震災は、これまで日本で経験したことの無い未曾有の震災でした。東日本太平洋沿岸地域の被災地では多くの市町村が壊滅し、2万5千人を超える死者・行方不明者がでたと報道されています。また、約40万人の人々が被災し25万人の人々が避難所生活を余儀なくされています。さらに、電力・水道・交通といった社会基盤が壊滅的な被害を被りました。

この様な中で社会に船出される皆さんには、本学で研鑽された研究成果を十分に生かし、それぞれの人生の新たな段階を切り開くために一層奮励努力され、また、社会の基盤の再生のために貢献して頂くことを祈って止みません。

皆さんの新しい旅立ちにあたって、これからの仕事を進めていく上で大切なことについて一言、お話しさせていただきます。

資源の乏しい日本では、人的資源、とりわけ科学技術が社会の発展と維持に重要な役割を果

たしてきました。科学技術は、世界が直面している様々な困難を克服するためにも大きな力となります。

昨年、2010年のノーベル化学賞は、「有機合成におけるパラジウム触媒クロスカップリング」に対し、米国のRichard F. Heck博士とともに二人の日本人研究者、根岸栄一博士、鈴木章博士に授与されました。

ノーベル賞委員会は、「試験管内の偉大な芸術 Great art in a test tube」と題した受賞理由の中で、次のように述べています。「有機化学は、科学者たちが試験管の中ですばらしい化学的創造を行なう芸術的な表現形式といえるまでに進展した。人類は、医薬品、ますます精巧になったエレクトロニクス、先端技術材料という形で、その恩恵を受けている。2010年ノーベル化学賞は、今日化学者が手にすることができるもっとも高度な手法の一つに与えられる。」としています。

また、ノーベル賞委員会は研究成果の意義については、次のように述べています。

炭素をベースとした化学は生命の根幹であると同時に、花の色、蛇の毒、ペニシリンのような抗菌剤など数多くの不思議な自然現象の原因でもある。有機化学は天然の化学に基づき更にそれを発展させ、炭素原子のすぐれた性質を利用して、機能性分子に必要な安定な骨格を作り出すまでになった。これにより人類は、新しい薬やプラスチックのような革新的な物質を手にすることができるようになった。

これから科学技術分野で研究を進められる皆さんにとっては、根岸、鈴木両先生がどのように研究を進められたかを知ることは、大きな意味があると思います。

炭素結合によって複雑な化合物をつくるクロスカップリングは、非常に有用な研究であり、日本では数多くの研究者がこれに挑みました。

1972年の京都大学の熊田先生による研究を始めとして、クロスカップリングという有機合成における偉大な道具の開発の研究は、「日本のお家芸」といわれ、多くの日本人研究者が切磋琢磨した研究分野であります。

このような背景の中で、根岸、鈴木両先生がノーベル化学賞を受賞されました。このことは、日本の科学技術の水準の高さを示すものとして、日本の人々に大きな誇りと喜びを与えました。

根岸、鈴木両先生には、共通の恩師がおられました。

1979年に有機合成の功績によってノーベル化学賞を受賞したハーバート・ブラウン(Herbert C. Brown)博士です。

根岸先生は、ブラウン博士から教えられ、自らの研究の指針としていることとして三つの言葉を挙げておられます。

一つめは、新しい大陸を見つけること(discovery of big continent)

二つめは、あくなき探求(systematic exploration)

三つめは、永遠の楽観主義(eternal optimism)

即ち、新しいものを造る、あるいは発見する喜び、そのことに対する興味、あきらめない気持ちを原動力として粘り強く研究することができたと述べています。そして、その原動力をもって、Excel through competition、即ち、世界で勝負することが大切と、教えられたと言っておられます。

同じく、鈴木先生は、研究に興味を持ち、おおらかな気持ちで粘り強く努力している研究者には、思いがけない幸運、セレンディピティ(serendipity)に接する機会が与えられるとおっしゃっています。

Brown博士の口癖でもあり、ノーベル賞受賞講演の題目にもなっているのが、「大きな榎の木も小さな団栗から From little acorns to tall oaks」という言葉です。

これは、有機合成化学がなし得る偉大な可能性を示しているだけではなく、地道な研究対象に粘り強く挑んでいく姿勢の重要性を述べています。

そして、研究者がこのような粘り強さを発揮できる大きな要因は、自分の研究に確信を持つということです。

科学研究者は、論理性、科学を追及する手堅い手法を厳しく訓練されます。この論理性と手堅い手法が、研究者の確信と楽観主義の源となるのです。

これによって、あくなき探求をつづける研究者に、幸運の女神が微笑んだ時、セレンディピティに接する機会が訪れるかもしれません。それは、偶然ではなく、新しいものを造る、あるいは発見する喜び、そのことに対する興味、あきらめない気持ちを持ち続けた人だけに訪れるものということができます。

研究の世界に本格的に入っていられる皆さんには、興味をいただける根元的な大きな目標を掲げ、創造と発見の喜び、それに対する興味、不屈の闘志を原動力としておおらかな気持ちで粘り強く研究し、世界で活躍して、人類に幸福をもたらす仕事をして頂く事を希望します。

本日は、博士の学位の取得、まことにおめでとうございます。

平成23年3月25日

京都工芸繊維大学長

江 島 義 道